

地域おこし協力隊通信

第23回

リポーター…
小林正英 隊員



マーケティングの授業中

皆さんこんにちは！
21回目の協力隊通信です。今回は、潮来高校地域ビジネス科と道の駅いたこは、共同で開発した「潮来のいちごこつぶふわこめはんけーき」について、お話ししていきます。

11月3日に開催された「潮来まちづくりシンポジウム2020」で、テーマになった「道の駅いたこ」の活性化。そのためのアイデアとして、潮来の特産品である米を使ったパンケーキを開発するという案が出ました。その案を現実にするため潮来高校地域ビジネス科と道の駅いたこが、タッグを組んで新商品の開発に取り組むというのが今回の事業です。私と森山隊員は、生徒が商品開発するためのマーケティングの授業をしたり、高校生の意見を道の駅いたこへ伝えたりという役割を担いました。

高校生は、商品開発、ネーミング及びプロモーションを、道の駅いたこは、高校生のアイデアを表現することを、それぞれ担当。その結果、写真①のようなパンケーキが完成しました。ちなみに、写真②は高校生が改良する前のパンケーキです。どうですか？全然違つと思いませんか？あくまで私の感覚ですが、②の方はなんだか昔のパンケーキみたいです。一方①の方は、最近のパンケーキに近づくことができたのかなと思います。このように変身できたのは、高校生が持っている若い感性のおかげです。さらに高校生には、新聞の取材やSNSの投稿などのプロモーションもやってもらいました。

販売期間が3月20〜28日なので、既に販売は終了していますが、高校生にとつて何かの学びになってくれればと思っています。



パンケーキの写真①



パンケーキの写真②

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる自然

第62回

水郷の魚たちー田んぼの水路で暮らす魚たち

潮来市内はもうすぐ田植えの季節。水が張られた田んぼで、イネがすくすくと育つ様子があちこちで見られるようになります。イネを育む大切な水は、霞ヶ浦北浦周辺の田んぼの場合、たいてい、湖近くの水路から強力なポンプを使って供給されています。市内のお年寄りの話では、このようなポンプによる灌漑システムができる前、湖近くの田んぼは足踏み式の水車で水路から水を汲み上げていたとのこと……たいへんな重労働だったようです。その当時、谷戸には湧水由来のため池がいくつもあり、ため池から水路を通じて田んぼに水を流す灌漑方式も主流だったとのこと。今では谷戸の湧水やため池は減りましたが、それらの水を水路で引いた田んぼもわずかに残っています。いずれの水路も湖に流れ込んでいます。

日本各地で田んぼの水路が魚類の生息場所として機能していることが示されてきました。湖に流れ込む水路での調査事例は少ないのが実状でした。昨夏、私たちの研究室が、北浦に流れ込む水路42本188地点で魚類調査を実施したところ、計24種の魚類が確認されました。谷戸の田んぼの水路では、湧水に依存するスナヤツメやホトケドジョウなどの絶滅危惧種が見つかりました。また、地方名でゴロと呼ばれるトウヨシノボリ類（写真1）やウキゴリのように、仔魚が湖で浮遊生活を送り、稚魚になると水路を遡上する在来種も多く採集されました。一方で、特定外来生物のチャネルキャットフィッシュ（写真2）が湖近くの水路で採集され、湖だけでなく水路でも外来種による脅威が確認されました。各種の出現状況と環境との関係を解析したところ、水辺に植物が繁茂し（写真3）、魚類の遡上を妨げる堰が少なくて湖のつながりが維持されていると、種多様性が高まる傾向も認められました。今年も調査を継続し、「水路のまち 潮来」の魚たちの暮らしを深掘りしていく予定です。

茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション
浜野 隼・木村将士・加納光樹



写真1 在来種トウヨシノボリ類



写真2 特定外来生物チャネルキャットフィッシュ



写真3 植物が繁茂した水路